

て菩薩が病気にかかるのは、大悲の心（共感する心）を持つているからである。」と述べている。さらに『摩訶止観』の「十乘観法」の中に「起慈悲心」の方法が説かれている。それは、菩薩は病人を見ると、慈悲の心を起して仮に病人と同じ病気にかかって、病人を看病して治す三つの方法である。すなわち空観による方法、仮の観による方法、中道の観による方法である。ついで佛敎者についてみると、慈悲の精神を持つて医療を行った。江戸時代にはいると医は仁術といわれるようになり、具原益軒は養生訓において「医は仁術なり。仁愛の心を本とし、人を救うを以て志とすべし。」と述べている。

医の心の現代の課題についてみると、日本医師会の倫理綱領では、「(三) 医師は医療を受ける人びとの人格を尊重し優しい心で接するとともに医療内容についてよく説明し、信頼を得るように努める。」とあり、河合隼雄は『ユング心理学と仏教』で「治療は、患者と治療者のすべてが演ずる相互作用以外の何者でもない。」と述べている。これからの医療は、大悲（共感）の心をもつて行うことが要求されると考えられる。

(平成十六年九月例会)

高 良育と日高涼台の用薬倫理をめぐって

中西 淳朗

P・フランツ・フォン・シーボルトが文政六年（一八二三）

に來日した際、オランダから与えられた課題のひとつに、西洋医薬品の日本への輸出拡大のための工作があった。

この目的のため彼の弟子の高 良育に『薬品応手録』という簡単な説明をつけた薬品目録を作らせ、文政九年（一八二六）のカピタン江戸参府旅行の随行の時、各地の日本人医師に名刺代わりにくばった。このことはシーボルト自身の旅日記（旧曆一月二十二日の下関の項）に、「外国の薬品を買わせる目的」のための簡明目録を、彼が出費し高 良育が和訳発行したと述べている。

この冊子の内容は余りにも簡便であったが、日本人医師は長崎へ洋薬をどんどん注文した。そのため配合禁忌などを無視した処方が多く出た。高 良育は責任上、十年後に『蘭法内用薬能識』という小冊子を発行した。天保七年（一八三六）のことで、文久頃（一八六三年）の紅毛薬種は三十年前の二・三倍の種類に増加している（氷見屋文書による）

高 良育は後著の序文を大坂の宗学の学者・篠崎小竹に代筆させている。

「蘭法が伝来してより我国の医人は、往々蘭法の多効に喜び、言葉巧みに諸人に試し病人に出費させている。その上、斃れた原因を理解していない。これはよく見られる事象で禁じなくてはならない」（中西釈文）

この一文は医師の子息にはじめて書けるもので、今日に於けるEBM (Evidence based medicine) 論拠にもとづく医療) に相当する文章である。朱子学者らしい一文といえ

る。

このような医療界の風潮を正すために『蘭法内用薬能識』では、作用、禁忌、併用可否に言及している。それでも正しい処方方は少なかつたようである。

シーボルトの弟子の日高涼台は、高 良斉訳編の『薬品底手録』が余りにも簡単なので、モスト等にならって薬効区分配列とした西洋薬の正しい用法を天保六年に書き上げた。

この原稿は天保七年(一八三六)に『和蘭用薬便覧』と題して刊行されたが、これの序文を姪の信(ノブ?)が書いている。

涼台老人(三十歳台なのに老人扱い)は、この種の小冊子は小澤瑣言ばかりで公刊するに値しない。発刊すれば町医は簡便に走り医の大本を忘れるから刊行は不可であると言った。私はこの本が用薬に非常に便利で、町医が上手に用いれば治療功者になる。それは仁術への近道ではありませんかと主張して出版にこぎつけた。(中西釈文)

この涼台の姪の発言は、近代の実用便宜主義と申すべき思考である。彼女の発言は、一八九九年にニューヨークで発刊されたメルク社のマニュアル初版が医薬品用法の全くの安直本である史実と考え合わせると興味深い。

しかし日高涼台は癒しの根本は用薬だけではないと主張し、続刊の『和蘭用薬便覧附録・上』の序文には、老人に言っても亦、冷笑するだけであつたと、別の姪・光が書いている。

良斉や涼台より一時代後の、中津の大江雲沢医師(文政五

年一八二二—明治三二年一八九九)が「医は仁ならざるの術、務めて仁ならんと欲す」と述べて医訓としたことを考え併せると、薬品中心医療に進みつつあつた時代における彼等の発言は、歴史的にまことに有意義なものであつたと思惟する。

(平成十六年九月例会)

HbA1c の発見の歴史

佐分利保雄

一九四九年 Pauling, L. が鎖状赤血球貧血患者のヘモグロビン(Hb)のβ鎖が正常者のHbとは異なる事を発見し、HbSと命名した。その違いはβ鎖のN末端から六番目のアミノ酸であるグルタミン酸がバリンに替つていた。彼らはこのような病気を分子病 molecular disease と命名した。この発見を契機として、異常を見つけようとする研究者が世界各地に現れた。これらの研究者は「異常ヘモグロビンの狩人」と呼ばれた。

山口県立医科大学、臨床病理学教授、柴田進は一九五六年、テネシー大学の Dr. Diggs の血液学レジデントコースを受け、一年経って帰国の途についたとき、空港に見送りに来た Diggs 師に「日本で異常ヘモグロビンの調査をします」と約束した。帰国した一九五七年から濾紙電気泳動法で検体の残りの血液について、スクリーニングを実施し三年間で一〇〇〇検体を調べたが一例の異常ヘモグロビンにも出会わなかつ